

ハロー フレンズ

ファイセック



FICEC

ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2006年 6月号 (隔月刊) 第85号

センターの機関誌をリニューアルしました

急速に国際化している日本と地域

日本にある異文化、多文化を
知ってもらうことが機関紙の役割

ふじみの国際交流センター理事長 石井ナナエ

16年度末に農林水産省が「わが国のカロリーベースの食料自給率は40%である」と発表しました。言うまでもなく残りの60%は外国から輸入されているわけです。食糧だけでなく生活に関わるあらゆる物が世界中を移動しています。それと同じに、世界中の人が国境を越えて移動し、日本にもその一部である約700万の人が1年間にやってきます。彼らは生活するために日本に来るのです。そして毎年3万6000組以上の国際結婚が成立し、2万人以上のダブルの子が生まれています。過去10年間を調べてみても、毎年1万5000人が日本に帰化しています。

このように急激に国際化・多文化化している地域では、市民全員で異文化への関心と理解を深めなければなりません。今までのように相手に対して先入観や偏見を持ち、遠巻きにして近寄らないでいたのでは、みんなが安全で豊かな生活を送ることはできないでしょう。世界中の異なった文化や風習を持つ人と知り合い・交流することで今まで気づかなかった価値観や意味を発見することができます。社会の矛盾に直面したり、教育・平和の

大切さも、彼らと共に暮らすことから実感することができます。

違いに気づいた時の驚き、違いをわかり合えたときの喜びとおもしろさを知っているのがふじみの国際交流センターであり、そのことを知らせるのが機関誌の役割だと思います。地域に暮らすいろいろな国の人の実情を多くの方に知ってもらってこそ、本当の意味での多文化共生の街づくりが実現すると思います。

今まで以上に大勢の方に、そうしたことをご理解いただくために、機関誌である『センターニュース』をリニューアルすることになりました。誌名も『ハローフレンズ』と新しくし、判型もB5判からA4判に大きくしました。新しく機関紙のための編集委員会ができ、約10人のフレッシュな編集委員が参加して、取材に奔走してくれています。ぜひ、新しい時代の新しい機関誌として成長してほしいと願っています。

読者のみなさまも、継続して読んでいただくと同時に、情報提供、ご指摘など、よろしくお願いいたします。

生活上の困りごととトラブルなどに対応 外国籍市民への生活相談

ふじみの国際交流センター（FICEC）では、外国籍の人たちが生活上でわからないこと、トラブル解決などについて身近な隣人として支援、アドバイスの活動を行っている。「日本に来て外国人だからこそその苦勞、そんな人を見過ごせない」というのが活動の動機と活力。

日本語教室から始まった相談活動

1年間で約500件にも達するというふじみの国際交流センター（以下「FICEC」）の「外国籍市民への生活相談」の活動は、現在は周辺自治体（富士見市、ふじみ野市、三芳町）からの委託事業（窓口業務）としても行われているが、もともとは地域の日本語教室で外国籍の人たちからの相談ごとを聞いていたのが始まりだった。

「1991年からですが、地域に住んでいる外国人のために週3回の日本語教室を始めました。公民館を会場にして、1時間半教えて、30分ほどコーヒープレイクで世間話をするのが毎回の楽しみだったんですが、その中で困りごとなどの相談を受けるようになりました」と、FICEC理事長で「生活相談」担当の石井ナナエさんは話す。

相談の内容は、日常生活の簡単なことから、国際結婚に関連する悩みのような複雑なものまでさまざま。こうした相談を通じて、日本人には簡単な事柄でも、外国人にとっては難題になってしまう問題がたくさんあることがわかった。それは、主として日本語に堪能でないことと、何か起こったときに助けてくれる親戚、知人が周辺にいないことが大きな要因だ。

石井さんたち日本語教室の仲間は、日本語指導とそこから派生した生活相談に対応するうちに、常設の「市民交流センター」のようなものが必要とを感じるようになったという。日本人と外国人とが日常的に交流することで、お互いに助け合う関係を作っていくための拠

点だ。そこで、1997年に「ふじみの国際交流センター」を設立。当時の上福岡市（現：ふじみ野市）に事務所兼オープンスペースを置き、日本語指導と生活相談ばかりでなく、地域在住の外国人と日本人とが気軽に交流しあえる場所としてつくった。

多数のスタッフが相談に対応

2004年4月～2005年3月の1年間（2004年度）に、FICECで受けた生活相談の件数は、延べ487件。この数字は、それぞれが別個の相談というわけではなく、相談内容によっては解決までに何回も対応するケースがあることから、一つの相談で何件かに数えられているものが含まれているが、ウィークデーベースで考えると毎日2件程度の相談に対応していることになる。

相談内容は次表のとおりだが、「教育」関係のものがトップを占めており、以下、生活、医

種別	内容	件数
教育	学校からの書類代筆、日本語学習支援、保育園・学校入園入学手続き	128
生活	生活費、生活保護、近隣住民との関わり、事故、国民年金・国保の手続き	58
医療	医療費、病院側の説明を聞く、入院、病院へ同行	52
言語	日本語支援、翻訳、通訳	51
家族	離婚、夫婦間問題、DV、交際相手、子ども	45
労働	休職・求人、会社とのトラブル	36
入管	ビザ、外国人登録証申請更新、帰国	17
住居	住まい探し、保証人	14
司法	裁判事務書類作成、税金、法務局へ同行	13
その他	ボランティア希望、友達がほしい	73
合計		487

療、言語、家族関係などが相談として多い項目となっている。

教育関係の相談が多いのは、日本人男性と国際結婚した外国人女性が母国から子供を呼び寄せるケースがかなりあり、その子たちの学校、保育園などへの入学や日本語指導、さらには学校から家庭への連絡事項などに関する相談が多いことによるものだ。

また、相談してきた人を国別に見てみると、フィリピンをはじめ、アジア各国出身の人たちからの相談が3分の2以上を占めている。

国	件数
フィリピン	116
バングラディシュ	79
中国	63
ブラジル	63
パキスタン	28
韓国	27
ベトナム	25
その他	86
合計	487

ちからの相談が3分の2以上を占めている。

相談の内容は、電話での対応ですむような簡単なものから、担当者が何回も対応しなければならないような複雑なものまでさまざま。さらに、そうした相談

は、いつ寄せられるかわからない。そこで、FICECでは、石井さんをはじめ10人が生活相談を担当するスタッフとして月曜日～金曜日の昼間、交替で事務所に常駐して対応している。みなFICEC周辺地域に在住する女性で、子育てなどの経験豊かな人たちだ。

日本にきて困っている人を見過ごせない

石井さんは、相談に応じる際に心がけていることとして、「相談がきたら、責任をもって一緒に動いて解決していくようにしています」と話す。例えば、DV（家庭内暴力）で夫に追い出された子供連れの外国人女性が相談に来たとする。その女性が日本で生活するためにやるべきことはたくさんある。夫と別居して滞在するためのビザを取る、とりあえずは収入がないので生活保護などを申請、子供と暮らすためのアパート探し、職探し、子供を預けるための保育園探し、日本語指導等々。

「ときには、暴力をふるって追い出した夫のところ説得に行くこともあります。そんな

ときには、刺されたときのためにとできるだけ厚着をしていったこともあります」と石井さん。もちろん、刺されたことはないが、当の女性といっしょに怒鳴られたり、威されたりしたことは何回もあるとのこと。

そんなにまでして、生活相談の仕事をする理由は、「外国から希望を持って日本に来た人たちが困っていたり、ひどい目にあっていたら、日本人として見過ごせないですよ。それに、相談者に子供がいたりすると、何とかしなくてはと感じます。苦労している子供たちや何かで傷ついている子供たちがたくさんいます。そういう子供たちをすくすくと育てるのは、周りの大人の責任で、知らん振りはできないと思います」と、石井さんは話す。

苦労もあるが喜びもたくさん

さらに、「苦労することは多いですが、うれしいこともたくさんあります。相談者から『うまく解決して元気に暮らしている』と報告してきたとき、それに私が風邪をひいたときなど相談者が心配そうに『大丈夫?』って電話してきたり、誕生日には電話の向こうでハッピーバースデーを歌ってくれたり。親身になって話をしていくうちに、相談者とは親子のような気持ちになることもあります。そんなこと一つ一つがうれしくて、お金に代えられない喜びがあります」とのこと。

そして最後に、「いま、日本には外国人の人権を守るための法律がないという気がしています。例えば外国人女性が日本人男性と結婚しても戸籍には名前が載らないし、住民票もない。こんなことは人権侵害ではないかとさえ思えます。もちろん私たちには力はありませんから、できないことはたくさんありますが、気づいたことについては、どんどん指摘して、制度そのものを変えることもやっていきたい。そのためにも、今後はもっと仲間を増やして、専門的な知識のある人の力を借りながらやっていきたいと思っています」と熱っぽく話してくれた。

（取材：秋山、安藤、川田、篠島）

札幌 国際大学の学生がセンターで研修

国際ボランティア志望の学生たち4人

日本語教室や子どもクラブなど、

センターの活動を体験して学ぶ



センターの説明を聞く



日本語教室で日本語指導を体験



外国人女性から、日本での暮らし
などについて話を聞く

今年3月22日～25日の4日間にわたり、札幌国際大学現代文化学科の学生4人が、ふじみの国際交流センターで3泊4日のボランティア研修を行った。

学生たちは国際ボランティアコースを専攻しており、将来的にはNGOなどで海外ボランティアとして活動する希望を持っている。しかし、国内での在日外国人の支援についても学びたいということで、今回の研修が実現した。

学生たちは引率してきた齋藤彩子教授とともに、さまざまな事業に直接参加、外国の人たちに日本語を教える体験をしたり、外国人から日本での暮らしぶりを取材、さらには日本人スタッフからも、活動にかかわる動機、活動状況について聞き取りを行った。

無理しないでリラックスして活動している

今回の研修に参加した学生たちは、次のような感想を話している。

「最初にセンターの建物を見たときには、正直『小さい』という感想でした。でも、活動の内容が詰まっているし、皆さんが無理しないで、楽しそうに活動していることにいちばんびっくりしました。こんなにみんながみんな『私は何もやってなくて、他の人たちががんばっているのよ』といいながら、活動が進行しているのが、本当に不思議な気がしました」(佐々木南さん)

「みなさん、すごくリラックスして活動しているのがすごいと思いました。どなたかのお孫さんが事務所に来て、いっしょに過ごしているし、外国の人たちも、入れ替わり立ち替わり訪ねてくるし、普通の家で相談に来ているような感じで、家族みたいなところに驚きました」(高木穰さん)

(取材：内藤、篠島)

「内なる国際化」の地域的取組み成功例

札幌国際大学人文学部現代文化学科教授 齋藤彩子

ふじみの国際交流センターでの研修は、札幌の日常では知る機会がほとんどない在日外国人の実情に関して学生が学ぶ格好の機会となりました。在日外国人といっても、出身国、職種、就労環境や教育レベル、経済状態等異なります。日本語能力も地域社会への適応能力、順応度もまちまちであり、対応は個人の実情に合わせてなされなければなりません。それをいとも簡単に淡々と楽しみながらこなしておられる(勿論実際は困難なことも多々あるのですが)ふじみの国際交流センターの方々に、学生は深い感銘を受けました。また、縁あって日本へ来たものの肉親の助けもない状況のなかで、センターの支援のもと専門技術・知識の習得等頑張っている方々からは、精神的な逞しさと日本社会の厳しい一面を教えられ考えさせられました。言葉も習慣も異なる日本へ来て、一生懸命学業に取り組んでいる同世代の若者にも大いに触発されました。今回の研修は、理念として頭で分かったつもりの異文化理解や言語コミュニケーションが、実際の場面では雲散霧消してしまうほど厳しい現実があることや、人を理解することが自分の心の問題でもあることを知る機会となりました。

日本の人口は2007年度には頂点に達し、以後急速な減少傾向にあると予測されています。その影響はもう一方で進む高齢化への対応策に関連して語られることが多いのですが、労働市場、消費市場の縮小は日本経済には一大打撃となることから、この面での早急な対応策の検討が要請されています。そのため法務省は平成16年度末に、技術・専門職のほかに単純労働者の受け入れ枠拡大に関して検討を行う委員会の発足を発表しました。単純労働者数の規制がどの程度緩和されるかは検討の結果を待つとして、外国人労働者が将来は増えこそすれ減ることはない予想することは非現実的ではないと考えます。それは、日本国内の事情もさることながら、労働力輸出を必要とする国・地域が依然として存在しており、

それら諸国・地域からの圧力も強まっているからです。その結果、二世、三世後に日本において社会不安が生じる可能性はあると見て難くありません。昨年フランスで起きた中近東系若者による暴動はまさにその一例といえます。

日本は、1960年代からトルコや中近東諸国から労働者を受け入れたフランス、ドイツ、イギリス等の経験に学び、今から対応策を準備しておく必要があります。その中には外国人労働者の法的身分に関する法令等政府や公的機関が関わるべき部分がありますが、他方生活が安定し、日本社会に順応していくための環境づくりも必要不可欠です。そのような役割を日常生活に密接な関係を持つ地域社会が受け持つことができれば理想的であり、それを担うことになる現在の若者がその重要性を認識し、積極的に行動することになれば、問題の深刻度も軽減すると考えます。ふじみの国際交流センターの活動は、まさにそのような取組みです。日本の各地で住民がお互いに声を掛け合い、助け合う精神を育てていけば、日本の将来に対する一つの安全保障策、すなわち保険となることを示しています。

今回の研修に参加した学生は、日本の多くの地域社会が在日外国人と共存する時代に入りつつあることを、将来の課題と関連付けて認識することができました。同時に積極的に人と関わり人のために何かをすることで、自分自身が成長することも学びました。

今回の研修に関しては、唐突なお願ひにもかかわらず暖かく受け入れ下さり、このような素晴らしい体験をさせてくださったふじみの国際交流センターの石井ナナ工理事長並びに研修でお世話いただいた会員の皆様、お会いした外国からの方々に、学生共々心からお礼申し上げます。皆様の今後の一層のご活躍とふじみの国際交流センターの発展を北の国からお祈りしております。

外国人女性のDV被害者を救え

埼玉県内NPO団体などが市民フォーラム開催

今年3月12日(日)埼玉県蕨市の蕨市民会館で「外国人DV被害者支援」を目的とした市民フォーラムが開催された。蕨市内に本部があるボランティアグループ「KAFIN(カフィン)」が主催し、「ふじみの国際交流センター」(ふじみ野市)「外国人119ネットワーク」(さいたま市)「オープンハウス」(同)が協力して開催したものだ。

DV(ドメスティックバイオレンス=家庭内暴力)による被害をなくそうと、2001年に「DV防止法」(配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律)が制定され、主として夫からの暴力に対する妻、子供たちへの公的支援・救済策が具体化されている。

その一方で、国際結婚が年々増加している

ことから、日本国内でDVに苦しむ外国人女性も増えている。中には言葉の問題もあり、DVに対して公的支援があることさえ知らないで、1人で我慢しているケースもある。そこで、このフォーラムは、県内で外国人支援の活動を続けている団体が、その活動を報告し、行政との連携も含めて、より広く迅速な被害者支援ネットワークづくりをめざして開催したものだ。

フォーラムでは、関係団体のそれぞれから、活動実態やDV被害事例の報告が行われ、最後に今後の方向性として共同声明が発表された。

(取材:石井、川田、秋山)

共同声明の内容(抜粋)

埼玉県内で外国人DV被害者の支援をしている私たち4団体は、これまで相談にのってきたケースなどについてふりかえてみました。

身体的・言語的・経済的な暴力に加えて、外国人DV被害者たちは、ビザ更新に協力してもらえない、子どもを取り上げる、あるいは入管に密告すると脅されるなど、制度を悪用した暴力を受けています。

その底には、女性や外国人を一段低い位置にいるとみなし、彼らには暴力をふるってもよいのだとする差別的な考え方があると思います。

暴力から逃げ出す決心をした場合も、被害者自身が言葉の問題もあって支援システムについて知ることができないという壁があります。被害者がオーバーステイの場合は、さらにたいへんです。

最近異なる国籍の外国人同士のカップルも増え、それに伴ってDVの問題も複雑になってきています。

被害者たちのその後をみると、仕事を持ち、子どもを育てながら地域に定着している人、帰国した人などさまざまですが、被害者の生活再建は日本人の場合よりもいっそうたいへんで、長期にわたる支援が必要になります。

私たちは他の支援団体や女性団体ともネットワークをすすめて、公的な場で支援にたずさわっている人たちとも連携を深めていきたいと思っています。

このネットワークが、暴力や差別のない、暮らしやすい地域社会を創っていくために役立つことを願っています。

2006年3月12日

開催・協力4団体名

外国人女性のための技術・資格取得支援

「ホームヘルパー養成講座」が終了

5人の受講生がホームヘルパー2級資格を取得

ふじみの国際交流センター（FICEC）では、「文京学院大学地域連携センターBICS」の協力により、17年10月から「外国人女性のためのホームヘルパー資格取得講座」を行っていたが、BICSでの同講座が今年3月で終了し、受講生5人全員が2級資格を取得した。この事業は、フィリップモリスジャパン（株）の「市民活動・住民活動助成」を受けて実施されたもので、いわばNPO、大学、企業が協力して「外国人女性のための自立支援」に取り組んだ事業だ。

「ホームヘルパー」というのは、日常生活を送るのに支障のある高齢者や障害者に対して、その家庭を訪問して生活面のサポートサービスをする仕事のこと。ホームヘルパーとして働くためには、座学・実技を含めて130時間の研修がある2級資格を取得しておく必要があるとされている。

外国人女性にとっては、内容はもちろんのこと、講義で使われる日本語テキストが大きな難関。そこで、受講する外国人女性に対して、FICECでホームヘルパーに必要な日本語学習を実施、そしてBICSで日本人40人に混じっての講座受講となった。

今回の講座は週2～4回というハードスケジュールで行われたが、全員が全教程出席。めでたく2級資格の取得となった。

受講者の感想

「はじめは教科書のわからない箇所が多くて大変だった。ただ、勉強を続けていくと、だいたいわかってくるようになった。これから日本人と一緒に働くのだから難しい日本語もわかるように勉強したい」

「周りの学生さんが教えてくれたり、先生もゆっくり話してくれたり、すごく親切に対応してもらって、たいへんだったけど、楽しく勉強ができました」

「近所のお風呂屋さんで、足の不自由なお年寄りが困っているとき、声をかけて、手助けができた。ヘルパーの勉強をしていたので、本当に良かった」

「外国人ということで、ちょっと引く人もいたが、日本人でも、外国人でも知り合ってしばらくすれば同じ。外国人であることで、自分の国のことを話題に出来るのは一つの強みだと思います。こんなすばらしいことに関わらせていただいて本当に幸せです」

（取材：青木、広木）



センターの活動をご支援ください
会員・賛助会員・寄付のご案内

活動を担う会員.....正会員

正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

センターを財政的に支える会員.....賛助会員

賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
 口座名：ふじみの国際交流センター

ご寄付をいただいた方々

ご支援ありがとうございます

2005年4月～(50音順・敬称略)

青木和雄、阿澄康子、穴沢エミリン、荒田光男、石井ナナエ、伊藤智明、岩田ひさよ、岩田仁、上島直美、エスコラピラス修道士会、江原工業、海老原夕美、遠藤宏子、大関優、太田原裕、小沢ビクトリア、小原富明、(株)オムテック、葛西敦子、加藤久美子、カトリック教会、金子朝子、金子忠弘、神田順子、金文玉、栗島三千代、侯、国際ソロプチミスト、後藤泰博、サークルクムスタカ、庄子一雄、申常午、菅山修二、鈴木譲二、鈴木美佐子、高橋郁子、武田和子、チョン玄淑、常西カツエ、寺村壁如、戸塚成子、内藤忍、仲田京子、中村禎作、萩原千代子、橋本弘美、長谷川正江、羽石貴裕、東入間地区遊技業組合、広木加代子、藤林泰、三芳アジア友の会、百瀬混、矢野やす子、山崎友理、若林祥文

ご寄付は税金の控除や損金参入の対象となります

ふじみの国際交流センターは、国税庁からの認定を受けた「認定NPO法人」ですので、ご寄付は、法人であれば損金参入が認められ、個人であれば寄付控除の対象となります。

ふじみの国際交流センター (FICEC) のスクール、クラブ

<p>日本語教室 「生活に役立つ日本語の習得」を目標に、日本人が日本語で教える教室。 毎週木曜日 午前10時～12時 受講料：無料</p>	<p>国際こどもクラブ 日本語が不自由な子どもたちに日本語や勉強を教えます。 毎週土曜日 午前10時～12時 受講料：無料</p>	<p>パソコン教室 外国人、日本人にパソコンの技術指導をします。 月2回土曜日開催 午後1時～3時 受講料：日本人1000円 外国人300円</p>	<p>国際スポーツクラブ 上福岡の中学校体育館でバスケットボールを楽しみます。 毎週日曜日 午後7時～9時半 参加費：無料</p>
<p>中国語教室 学習者の中国語能力により、初級、中級上級に分かれて学習します。 毎週金曜日 午前10時～12時 冷暖房1回200～300円</p>	<p>韓国語教室 韓国語初級講座。韓国人の先生が、やさしく丁寧に教えてくれます。 毎週月曜日 午前10時～12時 受講料：1回500円</p>	<p>ポルトガル語教室 ブラジルで通訳をしていた日本人の方が指導してくれています。 毎週火曜日 午前10時～12時 受講料：1回1000円</p>	<p>英会話教室 初心者を対象としたスクールです。グループで楽しみながら勉強します。 毎週水曜日 午後7時～ 受講料：月4回4000円</p>

編集後記

あなたも編集委員会に加わってください。大歓迎です。

生活相談の取材をして、日本で生活する外国人が直面している問題がたくさんあることを知りました。どんな問題にも全力でいっしょに解決していくセンターの皆さんの心強さと温かさを感じました(安藤)

レインボー、ジャンボ・・・誌名ひとつ決めるだけでも、議論白熱。幾週にもわたって話し合い、ついに決定！老若男女、知恵を絞って、楽しく有益な誌面を目指しています(上原)

この企画にかかわって、心の底から、言葉や伝えることの難しさを知りました。1年経つころには成長してたらな・・・と思っています(川田)

リニューアルに伴い、新しく編集委員になりました。編集という作業は、はじめての経験で、毎回いろんなことを発見して学んでいます。日本人と外国人が仲良く、共に理解しあって暮らしやすい地域社会の実現に向けて、少しだけでも役にたてたらと

思っています！「より読みやすく、より伝える」ニュースになるよう驚きや感じたことを素直に分かりやすく伝えていけたと思います。宜しくお願いします(篠島)

昨年からのいろいろな作業をしてきたリニューアル第一号がようやく出せました。「外国籍市民」をキーワードに、楽しく、興味深い誌面を作っていきたいと思えます。何か情報がありましたら、ぜひ教えてください(内藤)

編集スタッフ

発行者：石井ナナエ(センター理事長)
 編集委員(50音順)：青木和雄、秋山理恵、阿澄康子、荒田光男、安藤貴子、岩田仁、上島直美、上原美樹、王祺、川田明香、黄耀潤、斉藤恵子、篠島幹昌、高橋良子、内藤忍、長谷川正江、広木加代子、山崎友理

特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター

〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡5-4-25
 Tel : 049-256-4290 Fax : 049-256-4291
 生活相談専用電話 : 049-269-6450